総合病院国保旭中央病院

地方独立行政法人　総合病院　国保旭中央病院　総合診療内科

当科のシンボルマークに描かれているセントバーナードは、シェリー酒の樽一つ首にさげ、遭難者を探しにアルプス山中に分け入ることをトレーニングされた山岳救助犬です。手技を持たない診療科であるため、問診を中心に、身体診察、基本検査を駆使し、身軽な軽装備でどこにでも駆けつけ、「なんでも、まず診る」を信条に、常に診療に当たっています。特に力を入れているのが病歴、身体所見、基本検査、画像が整合性を考えた臨床推論による「診断学」です。検査や画像に振り回されない、臨床推論からなる「正しい診断」があって初めて、正しい医療が展開されると信じています。

部長は塩尻俊明で、医長が３人で、医長それぞれのサブスペが循環器内科、呼吸器内科、神経内科となっています。他に主任医員１人、シニアレジデントが３人の８人体制でとなっており、そこに初期研修医８名のローテーターが加わります。救急外来からの入院が多く、患者数は平均 70 名で、主に感染症、敗血症性ショック、糖尿病合併症、電解質異常、脳血管障害、てんかん、意識障害、COPD や間質性肺炎などの呼吸器疾患、高齢者の心不全、不明熱、血管炎、低体温、熱中症、いくつかの専門科にまたがる複数の疾患をもつ患者、内科合併症や全身状態が不良の内科以外の他科患者など多彩な疾患を担当しています。外来は、週２回新患外来を開設し、紹介状を持たずに来院する一般内科患者さんだけでなく紹介患者さんにも対応しています。そこではシニアレジデントの外来トレーニングも行われ、シニアレジデントがまず診察した上で、スタッフと議論し方針を決定する屋根瓦方式をとっています。そこで経験した外来症例の振り返りカンファレンスも定期的に行われています。当科は振り分けを主とした問題転嫁型総合診療ではなく、メンバーに各サブスペに長けたメンバーが在籍し、70 床からなる入院病棟も有しているため、科内で各プロブレムを効率よく解決できるため、問題解決型の総合診療が可能となっています。スケジュールは、前日の新入院患者全例をプレゼンする早朝カンファレンスから始まり、ベッドサイド回診は各チームで毎日行われ、昼にはケースカンファレンスが連日開催されています。午後には各チームでチャートラウンドが行われています。シニアレジデントには、症例の豊富さから学会発表や英語論文にも積極的に取り組んでもらっています。